# 結婚学の研究 III

## ― 短大生が描く生活設計について ―

古　澤　暁

### はじめに

人間の行動はその主体と環境との相互関係で変化する。生活者が現代から未来にむかって、その主体と環境の変化を見通して、計画的な生活を創造する試みが生活設計である。

人間の生活史からみて、生活設計をたてる時期は、結婚直前・新婚当初・第1子出生時・夫の退職時・夫婦の一方の死亡直後などが考えられる。しかし、これらの時期は生活設計をたてざるを得ない状況になって、必要に迫られて、生活設計をたてるのである。それにくらべて、青年期は未来を展望し、将来の生活を予想し、最も主体的に生活設計をたてやすい時期であるだろう。

そこに、青年教育のプログラムとして、生活設計についての教育が考えられるだろう。

### 目　的

短大生の実態を把握し、その教育を考えることを研究の目的としている。ここでは、短大生が考えている卒業後の生活設計について調査する。

### 方　法

1．調査方法　短大生に記名させて、「卒業後の生活設計」についての課題作文、自由記述させた資料を分析する。

2．調査期日　昭和50年10月

3．調査対象　短大2年生　60人

**結果・考察**

ここでは、婚前期・新婚期・家族形成期・家族成長期・家族成熟期・隠退期の六つに区分した家庭のライフ・ステージ（表1）にそって資料を分析する。

**表1**　ライフ・ステージの分類

| ライフ・ステージ | 呼　　称 | 段　　階 |
|---|---|---|
| 1 | 婚　前　期 | 結婚するまで |
| 2 | 新　婚　期 | 結婚から第1子誕生まで |
| 3 | 家族形成期 | 第1子誕生から末子の小学校入学まで |
| 4 | 家族成長期 | 末子の小学校入学から最初の子供独立まで |
| 5 | 家族成熟期 | 最初の子供独立から最後の子供独立まで |
| 6 | 隠　退　期 | 最後の子供独立から以降 |

（三井信託銀行編「ライフ・プランニング」より）

1．婚前期

彼女らは短大を卒業後、事務職を希望して就職し、職業生活を2～3年（表2）の経験をした後で結婚することを望んでいるのである。

この期間の生活意識は、結婚までの自由な時間を楽しみ、社会経験を求め、自己の能力を試めし、職業生活をのぞきみようとする体験学習の期間とみることができる。

また、結婚相手を探し、花嫁修業、結婚準備期間であり、お稽古ごとすべては生きがいということに結びつけられそうである。

「社会経験を豊にする」「知識を広げるために役立し、世間というものを

知らなければいけないと思います」「社会のきびしさに触れてみたいと思います」「社会的大人つまり社会に通用する人間になりたい」

「会社つとめは休日が多いから、その暇を利用して何か趣味をもちたい」「おけいごとにせんねんする」「旅行をしたい」

「自分をみがく花嫁修業にもなる」「恋愛もする」「就職して働いている間に自分が本当に愛せる男性そして自分だけを愛してくれる男性を見つけて結婚したい」「貯金したい」「手に職をつけるために和裁・洋裁の専門学校に入学して勉強する」といっている。

2．新婚期

彼女らは、23～25歳頃に結婚することを望んでいる。おそくとも30歳までには結婚したいと考えている。(表3)これは世間一般の結婚適齢を意識していることが考えられるのである。

「結婚に強いあこがれをいだく」「一生幸福になれる相手をみて結婚する」「人生の目標はいかにすばらしい家庭をつくることである。」といっている。

**表2** 勤務年数

| 勤務年数 | 頻数 |
|---|---|
| 2年 | 14人 |
| 3 | 15 |
| 4 | 8 |
| 5 | 9 |
| 10 | 2 |
| 長期 | 5 |
| 無記 | 4 |
| 進学 | 3 |

**表3** 結婚希望年齢

| 年齢 | 頻数 |
|---|---|
| 21歳 | 1人 |
| 22 | 4 |
| 23 | 13 |
| 24 | 14 |
| 25 | 17 |
| 26 | 2 |
| 27 | 1 |
| 30 | 3 |
| 無記 | 5 |

**表4** 出産年齢

| 年齢 | 第1子 | 末子 |
|---|---|---|
| 22 | 1人 | 人 |
| 23 | | |
| 24 | 3 | |
| 25 | 11 | 1 |
| 26 | 3 | 4 |
| 27 | 2 | 3 |
| 28 | 3 | 4 |
| 29 | | 2 |
| 30 | 1 | 14 |
| 33 | | 6 |
| 無記 | 36 | 26 |

配偶者の条件については、「愛し愛されるべき人と20～23歳の間にめぐりあいたい」「生活力さえあって、自分と親の気持を理解してくれれば良いのである」「自分にあった人であれば高い理想はもっていない」「容姿は良いことにこしたことはないが相手の人間性を重視して相手を選ぶ」「相手の人格、経済力がなどいろいろ考慮したうえで」「普通のサラリーマンと結婚する」「なるべくなら長男と結婚したくない」「年齢にはこだわらないが健康である人が良い」「２つくらい上の男と結婚したい」「第１子が私の36歳で就学、大学まで出して、52歳であるから配偶者は３歳位年上で、第１子が卒業頃には55歳停年退職である」とあげて、現実的に考えている。このことは、計算した上で、配偶者の選択を考えているのである。

結婚の形態について明記しているものは少なかったが、見合結婚よりも恋愛結婚が多かった。

職業生活は結婚前に辞めてしまい、共働きで、結婚しても仕事を続け、子どもを育てたいと考えているものは少なかった。

彼女らは、生活が経済的に成立つならば、共働きはしたくないのである。しかし、子どもが生まれるまで、職業生活を継続してもよいと考えているものもいるのである。

彼女らは、結婚した後は、家庭に入るのが当然だと考えているのである。

「平凡かもしれないが、母親はやはり子供と共にいるべきだと思う」「家に帰って母親がいないさびしさを味合わないようにしてやりたいので」「結婚相手が家庭にいることを望むなら仕方がない」といっている。

結婚後の住居については、彼女らは新婚期の間、夫婦だけでの生活を望んでいるが、なかに、両親との同居の条件として、職業生活の継続を認めてくれるならばとか、子守りをしてもらえるならば同居してもよいと考えている。このことはライフ・ステージ５・６の段階で、親と子の立場が入替って、あらわれてくることでもあるのである。

この新婚期は短かい。それは、彼女らが結婚後１年目に第１子の誕生を

期待しているからである。

新婚期を２～３年夫婦だけで楽しみたいといっているのは１人だけであった。

３．家族形成期

彼女らは結婚し、母親になることを期待し、望んでいるのである。そして、彼女らは結婚後１年目に第１子の誕生を予想しているのである。

彼女らの家族計画は、末子の誕生を30歳までにと考え、子どもの出産数については、２～３人で、子どもの年齢差を２～３歳と考えている。（表４、表５）

**表５**　子どもの出産希望数

| 出産希望数 | 頻数 |
|---|---|
| 子がほしい | 12人 |
| ２人ほしい | 27 |
| ３人ほしい | 13 |
| ４人以上 | 4 |
| 記入なし | 4 |

**表６**　子どもの性

| 出生順＼希望性別 | 男 | 女 |
|---|---|---|
| 第１子 | ７人 | ８人 |
| 第２子 | 9 | 8 |
| 第３子 | 5 | 2 |
| 男児と女児 | 5人 | |
| どちらでもよい | 36 | |
| 記入なし | 2 | |
| 結婚しない | 2 | |

子どもの性別の希望を明記しているものは（表６）にみられるとおりである。彼女らは男児と女児の両方の子どもを生み育てたいのである。

この期は子育ての時期で、子どもの誕生のことのみで、その他のことについてはふれていない。

４．家族成長期

この期は彼女らの位置から、自分の母親の毎日の生活を身近かなモデルとして観察することができる。それは彼女らにとっては、母親の生活が、そのまま10～20年後の自分の姿として考えてみることができるのである。

彼女らは教育ママにはなりたくないと考えながらも、一方では高学歴社会がやってくることを予想して、子どもの教育を考えているのである。

彼女らは子育てを終えて、自分の時間がもてるようになったところで、自分の世界を考えるのであるが、それは趣味・教養を高めることと、家庭経済を考え家計のこと、将来の生活を考えて収入を得るために働くことを考えているのである。

「私は絶対大学へ行かせる」「子供の教育に追われる毎日であろう、しかし、働きざかりの年ゆえ子供の教育の他にいろいろな知識をみにつけ、子供たちによい影響をあたえる存在となり、子供の成長を見つめたい」「ゆとりができたらもう一度勉強したい」「通信教育で勉強して保母になりたい」「パートでもよいから働きたい」「50歳まで働く」「母のように家庭と仕事を両立させていきたい」「家をたてたい」「だ菓子屋でも開店したい」「書道塾を開く」「茶道・生け花の教授」「社会福祉の仕事で社会復帰」「趣味をもつ」「好きなことで自分の時間をもちたい」「海外旅行をしたい」「両親の世話」「子供の結婚資金計画」「老後の生活設計」といっている。

5．家族成熟期

この期間は新婚期についで短かく、彼女らは生きがいと老後の準備をする時期としてみている。子どもの結婚については、自分と同様に考えている。

「毎日を精一杯働きたい」「自分の能力をふるに発揮して活動を推めていきたい」「主人の停年の年頃アドバイスをしたい」「貯えた金で子供の独立に半分自分達の老後に半分を残して置く」「自分の幸福をみつけたい」「上の子（女の子）は23歳位でお嫁に出し、下の子（男の子）が25歳位になった時嫁をもらいたい。その頃は私ももう50歳を過ぎているので身につけたおけいこ事などを趣味に、他人に教授していきたいと思う。息子の結婚後、2～3年は別居が望ましいだろう」「老後のことを決める」といっている。

6．隠退期

この期は子どもが独立した後、新婚期と同様に夫婦二人だけの生活を楽しむことができる時期である。しかし、この期は問題がいろいろとあるので、老後を楽しく生活することができるかどうかわからないことでもある。

**表7** 老後の住居

| 項　　目 | 頻　数 |
|---|---|
| 老後子供の家族と同居を希望する | 13人 |
| 老後子供の家族と別居を希望する | 12 |
| 老人ホームに人居を希望する | 2 |
| ポックリと早く死ぬのがよい | 12 |
| 考えていない | 21 |

平均寿命が延長し、老後といわれる期間が長くなっている。老後の生活がどうあるべきかという問題は、今後の社会における最も重要な問題であるだろう。

老後の生活費の問題、仕事の問題、居住環境、老後は誰れと住みたいか、老後の家族形態、つまり老後を誰れと暮したいかという問題、社会関係がどうあるべきかの問題等がある。彼女らは、子どもと孫と一緒に住みたいという意識がかなりあるようである。

老後の家庭生活、老後の住居については、彼女らが、結婚するとたちまち直面する問題であるのだ、それは嫁と姑の問題であり、親と子の問題である。それが老後の問題であるだろう。

「長男夫婦と夫と孫に囲まれて平凡に暮らしてゆくような気がする」「夫と一緒に子守りをしたりして静かな余生を送りたい」「子供にも孫にも尽されたい」といっていることは、新婚期にあげた、「なるべくなら長男と結婚したくない」いわゆる長男の嫁にはなりたくないが、自分の老後は長男の家族と同居したいということは矛盾していることなのである。

彼女らは、婚前期で習ったお稽古ごとをいかして、老後の生きがいと収入の道を考えているのである。

「別居生活をしてけいこごとを教える」「趣味を生かして楽しい老後、完全に自分の時間を取戻し夫とともに楽しい老後をおくりたい」「のんびりとはすごしたくない忙しくてもよいから充実した生活がしたい」「停年後再就職、社会活動への参加」「大学の近くで下宿屋をしたい」

彼女らは、寿命について、天にまかせて長寿を全するのと、他人に迷惑をかけないように早く死にたいともいっている。

「夫婦そろって長生きしたい、天にまかせて生きていく」「65歳位でいい」「あまり長生きしたくない」「ポックリ死にたい」「迷惑をかけたくない60歳位でまわりの人におしまれながら死ぬのがいいなと思います」

「お金をためて主人と二人で老いても愛にみちた幸せな老後を送りたい」「みんなからすかれるおばあさんになる」と楽しい老後を考えている。

「私が将来のことを、つまり結婚して、妻となり母親となり、そして私の両親、夫方の両親、年老いていく両親の身辺のさまざまな世話をする。私をここまで育ててくれ、これからも何かと人生の道案内をしてくれる両親に幸わせな余生を送ってもらえるように頑張りたいと願っています」といっているものもいる。

7．彼女らは、自分の生活設計を読み返して、次のようにいっている。

「子供がすべてだったというような暮しはしたくないが果してどうか。こうしてみると子供やだんな様のことばかりで自分の生活設計というのは家庭の主婦にとって、家族の生活設計になりやすいのではないかと感じた」「結局女というものはその相手しだいで運命が変わるという考えに賛成である」「自分の生活設計を考える時、大きな問題となるのは結婚であると思う」「今ここで読み返してみて、なんと夢のない打算的なつまらない考えをするようになったのだろうかとあきれているところ、他の人とは違うんだなんていう思いあがりをもっていたにすぎない。私も他の若い女性が願う

であろうことを望むなんて、それに、この考えには、少しも他の人のことが入っていない。ただ、自分の子どもがとか、そういうことばかりで」

これは、彼女らが結婚、そして家庭生活を意識して生活設計を描いたと考えられる。彼女らが結婚を意識して生活をしていることも示唆していると考えられる。

女性の生活史のなかに、最終学校を卒業した後には、短期就労の職業生活を経験することが一般化し、社会に定着してきたと考えられる。しかし、それらは結婚を前提とした職業生活で、生活をかけた職業生活ではなくて、結婚退職という理由でいつでも辞めて、家庭に入る生活である。この結婚・退職・家庭を守るという生き方は、結婚についての考え方、結婚観にみられる価値観の問題として考えてみる必要があるだろう。

結婚を望むということは、女性の幸福が結婚生活にあるのだという意識があるからで、若い女性に結婚志向が強く見られるのは、女性が結婚することによって安定した生活が保証されるものと考えるからである。

今までは良妻賢母の思想のもとに、女性は家を守り、夫に仕え、子どもを育てることのみで主婦としての生きがいがあった。彼女らの時代には、寿命の延長にともない、女性はかなりの時間の余裕が生じてきて、その余裕の時間をいかにして有意義に生きるべきかということが、彼女らの今日的大きな課題となってきているのではないだろうか、そこに、女性の新しい生活様式が考えられないだろうか。

彼女らは、いつまでも、子どもに密着した生活をせずに、子どもから積極的に離れて、子離れして、1人立ちするものとして、自己のための生活を創造することが必要になってくるのではないだろうか。それは受身的でなく能動的に自由な時間を楽しみ、好きになる教育をしなければならないだろう。

現在開かれている公開講座とかばかりではなく、専門教育をうける機会が準備されてもよいのではないだろうか、たんなる一般教養としてのみで

なく新しい領域での専門教育が考えられ、女性の職業生活についても新しい専門分野が考えられてもよいのではないか。女子教育が若い未婚者のためだけの教育ばかりではなく、家庭の主婦、中・高年齢者のための再教育、能力再開発が考えられよう。それを受け入れる社会が必要になってくるのであるが。子育てが終った女性のために、家庭の主婦が正規の学生として、どんどん入学して勉強できるように、ほんとうのいみでの勉強をしにいく大学があってもよいのではないかと考えるのである。

**むすび**

短大を卒業した彼女らは、結婚までの短期就労を希望して2～3年の会社勤めの生活を楽しみ、結婚適齢期を過ぎないうちに、周囲の人々から期待され、結婚に夢や希望をもって永久就職・結婚していく。結婚後は、子育てのこと、夫のことに気をつかう生活設計を考えている。

生活のなかの消費生活は、積極的に生活設計のなかに組込まれてもよいと思うのだが、彼女らに、それらの経験がないためか、具体的に展開されてなかった。

**参考文献**

○婦人に関する諸問題調査会議編　昭49　現代日本女性の意識と行動　大蔵省印刷局
○三井信託銀行編　昭49　ライフ　プラニング　東洋経済新報社
○森岡清美編　昭49　新・家族関係学　中教出版
○山手茂著　1974　現代日本の婦人問題　亜紀書房
○山手茂著　1974　現代日本の家族問題　亜紀書房